

国語

一 問一 A 風潮 B 白熱 C 勢い

問二 自分が何気なく発したことばが、どういうわけか人を傷つけてしまったことにとまどい、正しいと思って発したことばがやはり人を深く傷つけてしまうことに怯えている。

問三 人びとがインターネットでつながり、多様だった意見や考えがひとつに集約されることで、異なる考え方や価値観が排除されるようになり、世界が狭く、息苦しいものになってしまうから。

問四 ③ 何か行動を起こす前に、あれこれ考えず、とにかく思い切ってやってみることが大切だ。
④ あせって結果を求めることなく、納得いくまでゆっくりと時間をかけて物事に取り組むこと。

問五 ひとつにまとまり、自分たちと異なる考えに不寛容な人たちが世界中で増えている今、ことばは人を傷つけるものであり、それゆえ、決して人を傷つけまいとする意志と緊張をもって発するべきだと説くカミュや、無理に他者と関わろうとせず、バラバラでいることの健全さを訴える峯田の存在は、性急に事を運ばず、正しい道を探ろうとする筆者の姿勢を後押しするものである。

二 問一 A 思案 B 歩調 C 不動産 D 表札 E 難しい 問二 ア 芽 イ 計算

問三 今井さんが、夜にこっそり生ゴミをマンションの前に捨てに行ったり、悪口を書いた手紙を近所に配ったりしたこと。

問四 母親が病気で困っているかすみちゃんの役に立ちたいと思って、いろいろ手伝っているうちに、もう来ないでほしいと言われてしまったことで、人に同情して親切にするのは、する側はいい気持ちになれても、される側は苦しく、うつとうしいと思うことがあるということを知ったから。

問五 誰が悪いことをしている人なのかと、いろいろな人を疑っている羽美を見て、いい人がまるごといい人だというわけではないし、悪い人だと言われている人がまるごと悪いわけでもなく、その人がいい人か悪い人かを簡単に決めることはできないということを分かってほしかったから。

解説

一 出典は、高橋源一郎「高橋源一郎の飛び教室——はじまりのことば」(岩波書店)。

問二 小説家や思想家、劇作家などとして幅広い分野で作品を残したフランス人「カミュ」が「ことば」というものについて、どのように考えていたのかを答えます。傍線部には、「カミュのことば」は「とまどいながら、自分自身を疑いながら、怯えながら、書かれて」いるとありますので、この部分を読む限り、カミュは何か、ある一つの要因に「とまどい」「疑い」「怯え」ながらことばを発していたということになります。ところが、設問は、カミュが「何にとまどい、何に怯えているのですか」と聞いていますので、「とまどい」と「怯え」について、それぞれの要因(二つ)を区別して答えることが求められているとも受け取れます。判断に迷うところですが、ひとまず、カミュをとまどい、怯えさせる「何か」「何に」に当たる要素を拾った上で、区別すべきか否かを考えることにしましょう。本文では、① ことばは「誰でもいめい自分のうちにもっている」「ペスト」のような害のあるものであり、「引きりなしに、自分で警戒していかなければ、ちょっとうっかりした瞬間に、ほかのものの顔に息を吹きかけて、病毒をくっつけちまう(人を傷つけてしまう)」、②「自分は正しいと思って、ことばを発し」ても、そのことばが「誰かを深く傷つけ」てしまう、という、二つの懸念が示されています。どちらも「ことばが人を傷つける」という結果を招く点では同じことですので、「とまどい」と「怯え」を区別するのは難しそうですが、もう少し検討してみましょう。まず、①は「正しい」と自信を持って発したことばが人を傷つけてしまうことによって、(正しいと思っていた自分の)自信が揺らいでしまうという解釈から、これを「とまどい」の要因とし、②はそんなつもりはなかったのに(自分のことばが人を傷つけてしまう)という意外性、想定外の驚きが生じるという点から、「自分が何か言ったら、また人を傷つけてしまうのではないか」と疑心暗鬼になってしまったと解釈することで、「怯え」にあてはめることができそうです。

問三 『キズナ』ということばが持っているイヤらしさに「敏感な」^{びんかん}峯田さんは、「世の中で何かが起こ」と、「さっぱり関係ないはず」の人びとが、「私はこう思う」などと、「世界とすごくくっつい」^{みねた}た発言^{はつげん}をすること、すなわち「本来、自分と世界なんて違う」^{ちがう}のに「世界と一個になろう」としていることに疑問^{ぎもん}を呈しています。インターネットの普及によって、世界が「広がる」ことを期待していた峯田さんは、やがて「誰かがなにかをしてかす」と「謝罪しろ」、「有名人が亡くなる」と「ご冥福を」^{めいふく}といった声が一斉^{いつせい}に上がるようになり、世界が「どんどん狭く」なっていくのを感じて失望します。さまざまな意見、考え方^{おもん}が飛び交い、「バラバラだからおもしろい。バラバラだから」広かった世界は、インターネットを通じてたくさんの人たちがつながったことで、「ひとつの意見、ひとつの考え方」しか許されない、「狭く、息苦しいもの」になってしまいました。

問四 筆者は「嗅覚と聴覚に優れ、自分の鼻先の一本の角をまるで目印のようにして、周りの世界を確かめながら、ゆっくり、ただひとりで前へ進んでゆく」という「犀」^{さい}のような生き方、考え方をしたいと考えています。「いろんな人たちがあらゆるところで、いろんな意見をいって」いるのを聞くと、「なんだか、ぼくたちも、なにかをしなきゃならない、なにかをいわなきゃならない」というふうに「追い立てられているような気」がしてきますが、筆者はそういった世の中の悪しき風潮^{ふうぢょう}に流され、ろくに考えることもせず、根拠も持たないまま、いい加減な言説をまき散らすようなことのないよう、自らを戒める意味を込めて、一つ一つの物事について、丁寧に検証を重ね、考えを深めていくという態度を貫くことを宣言しています〈→④〉。「見る前に跳べ」は、よく考えて行動する「犀のよう」に」とは逆の態度ですが、筆者が「(このことばも) 大好きです」と言っているように、悪い意味ではありません。ゆえに「考えが浅い」「浅はかな」といった否定的なニュアンスではなく、悩んだり、迷ったりせず、まずはやってみよう（跳んでみよう）という積極的な行動を促すことばであることを説明する必要があります〈→③〉。

問五 カミュは、どんなことばでも必ず人を傷つける可能性があるという前提に立ちながら、しかし（それゆえ）「とまどいながら、自分自身を疑いながら、怯えながら」、誰をも傷つけまいという強い「意志と緊張^{きんちょう}」をもって、決して気をゆるめないように」注意して、ことばを発し続けました。また、峯田和伸は世界中の人びとがネットでつながり、ひとつの大きなまとまりとなって、自分たちとは異なる意見や考えを攻撃^{こうげき}、排除することばを一斉に発するようになったことに違和感を覚え、現代社会においては、つながらないこと、まとまらないこと、バラバラであることが重要な意味を持っていると考えています。この二人の思考、態度は、問三で答えた筆者の望む生き方に通じるものがあります。とまどい、怯えながら、慎重^{しんちょう}にことばを紡いでいくというカミュの姿勢は、嗅覚と聴覚を最大限に活用しながら、一本の角を頼りにゆっくりと確実に進んでいく「犀」を思わせ、バラバラでありたいという峯田の望みもまた、「(犀のよう) ただひとり歩む」ことを望む筆者の姿勢を裏づけています。

二 出典は、岩瀬成子「ひみつの犬」〈岩崎書店〉。

問三 お姉ちゃんと一緒に今井さんの荷物運びを手伝った後、羽美は「やさしそうなおばあさんに見える」今井さんが、実は「あんなこと」をした犯人なのだと話し始めます。「このマンションの入り口んところに生ゴミが捨てられてたの。さっきの今井さんがね、捨てたの」という羽美的言葉は、今井さんと別れた後のお姉ちゃんと羽美の会話をたどってしていくだけで容易に見つかりますが、これとは別に、場面が「宝ヶ池」に移った後半の「今井さんは普通のやさしそうなおばあさんに見えるのに～悪口を書いた手紙を近所に配ったりしたよ」も「あんな（悪い）こと」の一つとなりそうです。ただ、何に対する「悪口」なのは本文を読んだだけでは分からず、注釈^{注解}に説明を求めるしかありません。しかも、注釈からは「権力イロプラクティックの悪口を書いた手紙が配られている」ということしかわからず、どういう理由でどのような悪口が書かれているのかというところまでは不明です。設問は「具体的に」答えることを求めていますし、解答欄もさほど広くないので、本文に明記されていない、詳細^{じょうさい}のわからないことについて解答することはためらわれるところですが、怪文書の出所が今井さんであることは、本文にある羽美的発言から明らかですので、最低限のことだけは書いておいたほうが良さそうです。

問四・五 お姉ちゃんが「かすみちゃん」との思い出を語った後、話のまとめとして「いい人間になろうと自分で思って何かするってことはまちがいだった」と言っていることに着目しましょう。「お母さんが病

氣で困ってた」かすみちゃんの「役に立ちたい」と思って「いろいろお手伝いして」いたお姉ちゃんは、ある時、「もう、うちに来ないでくれる?」と言われてしまいます。お姉ちゃんはその理由について、自分の言葉がかすみちゃんを傷つけたからだと考えていましたが、やがて「もしかしたら、わたしが親切ぶつてることがいやだったのかもしれない。親切にするって、親切にしてあげてるほうはいい気もちになれるけど、ずっと親切にされるのって苦しいかもしれないから。かすみちゃん、ほんとはわたしのことが、ずっと前からうつとうしかったのかもしれない」ということに気がつきます。お姉ちゃんはかすみちゃんの役に立ちたいという自分の思いの裏に、彼女を助けることで「いい人間になれる」という打算があったことを羽美に告白しています(→問四)。このことをお姉ちゃんが羽美に話そうと思ったのは、「羽美が、誰かが悪いことをしている人かって、いろんな人を疑ってた」ことがきっかけです。お姉ちゃんは自分の経験(問四参照)をふまえて、「いい人がまるごといい人ってわけじゃないし、悪い人だと言われてる人がまるごと悪いわけではない」のだから、「(いい人か、悪い人かということを)簡単に分けられない」し、簡単に決めつけてしまうと、その人の本質を見誤る恐れがあるのではないかと、羽美に優しく問い合わせています。